

商大の日本語プログラムについて

高野 寿子

私は2000年の9月に小樽商大に赴任した。確か9月1日に辞令を頂いたと記憶する。学部を卒業してすぐ、外資系の光学機器メーカーに就職し、15年生活したアメリカでも、何度か大学で職を得たが、所謂雇用契約書（Appointment letter）なしで、つまり明確にどんな仕事を週何時間して、いくらお給料をいただけるのかを予め知ることなしに就職したのは、これが初めてであった。何も聞かないのはあまりに“unprofessional”だと思い、どんな仕事をしていくらいただけるのか、担当の方に伺ったら、「お給料は今経理で計算していますので」と言われた。しかし、秋学期は担当する授業がないとも聞いて、ゆっくり日本語プログラムについて考える時間もあると言われ、それ以上は追及せず、言われるままに9月1日大学に赴き、辞令を受け取ったのである。その辞令には確かに俸給についての記述があり、部厚いマニュアルのどこかにその意味が書いてあるらしかった。その時初めて、国立大学で職を得ることが公務員になるということなのだとはんやり認識したのだと思う。

新学期直前になって国際交流センターの事務方から渡された時間割には、補講のスケジュールが詰まっっていて、それらを私が担当するものと思っているようだった。私は、早速当時の交流センター長だった高橋先生に「話が違う」と抗議した。そして、結局、その秋から正規授業を担当することになった。ゆっくり事情を聴いてプログラムの骨格を考えようと思っていた当初の計画は、計画倒れとなり、とりあえず何人かの短期留学生に初級日本語を手当てすることになった。その年の留学生数は、80人ほどだという。国立大学の中で、在籍学生数に占める留学生の割合では、東大より多いのだとも聞か

された。商大が初めて採用した専任の日本語教員である私の仕事は、商大に在籍する全ての留学生に必要なレベルの日本語教育を施すことだと理解していたし、それは、元より遣り甲斐のある仕事だとも思われた。私の日本語プログラムは、しかし、こうして、留学生の実態もはっきり掴めないまま、既存の日本語科目を概ねそのまま引き継いで見切り発車となった。

学生は概ね優秀であった。学部留学生は、中国からの私費留学生が殆どで、韓国人学生も何人かいた。彼らは日本語能力試験1級レベルで、日本語を流暢に話した。短期留学生も皆礼儀正しく、真面目で何より英語が通じた。商大は外国語教育に優れた伝統があり、それ故、文科省の省令施設として言語センターがあると聞かされた。外国語は任意に2か国語選択できるという。つまり英語は必修ではないらしい。日本語も勿論必修ではない。しかし、学部留学生にとっての日本語は、教養科目の外国語という訳ではないが、日本語の単位が卒業に必要な外国語の単位になると学則にあるので、英語を苦手にする中国人の私費留学生は、先ず日本語の単位を取り、もう一か国語、英語かその他の言語を選択する。実際、英語の単位を取らずに卒業する学部留学生は何人もいた。問題は二つあった。英語は、本当に必要なのか。日本語は必修でなくていいのか。

後年、留学生試験が実施されるようになって、日本語能力試験ではなく、留学生試験の日本語試験だけで、入学できるようになり、私費留学生の日本語運用能力は低下したと思う。近年では、これで卒論が書けるのかと心配になる学生もいる。赴任当初は、日本語を必修にする必要はないのではと考えていたが、せっかく日本の大学を卒業するのであれば、必修にして日本語を確り修得させ、後々それが財産になることが望ましいのではないかと、最近思う。そしてこれは私見だが、英語は必要だと思う。英語なしで卒業するのは、如何にも彼らにとって社会的ハンデになると思うからだ。英語が必修でないとはいえ、英語以外の外国語を2言語履修するのは、ほぼ不可能な

ように時間割が組まれている。そこで日本語も英語以外の外国語と同じ時間帯に授業時間を組むようにし、留学生には先ずは日本語と英語を履修するように指導してきた。近年は、英語の必要性を自覚する留学生が殆どであるし、かなり英語も堪能な学部留学生もいる。アメリカやオーストラリアの協定校に短期留学を果たす者もいたと記憶する。

商大が課す外国語の卒業所要単位数は14単位で、1言語につき8単位或いは6単位を履修し2言語合わせて14単位とする。英語以外の外国語プログラムでは、どうも8単位コースか6単位コースかを予め宣言する必要があるようだが、日本語では、上級Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ（各2単位）を4セメスターで基本積み上げ式に履修するようにした。他の言語で8単位修得した学生は、上級ⅠからⅢまでの6単位をもって卒業所要単位を満たし、他の言語を6単位しか取れていなければ、Ⅳまで取って14単位にする。14単位を超えて修得した日本語の単位は、共通科目の自由選択枠に読み替えられる。日本語プログラムの仕事の一つは、勿論、留学生に卒業に必要な語学の単位を修得させることであるが、仕事はそれだけではない。外国語である日本語で学位を取得しようとしている留学生にとって、日本語は、その知的挑戦の糧であるから、学部の4年間を通して日本語を学び続けることのできる環境を整え、彼らの知的挑戦をサポートすることも同じように重要な仕事だと思う。それには、日本語の運用能力を訓練するいわゆる語学プロパーの科目としての上級日本語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの他にも、学生が日本語や日本文化について、できれば日本人学生と一緒に学ぶ科目が是非必要だった。

赴任当時、学部の日本語科目には日本事情Ⅰ、Ⅱというのがあり、非常勤の先生が数人の留学生を相手に授業をしていた。事情クラスに日本人の学生も参加できれば、双方に有益だろうと思うが、基本的には日本語科目は留学生のみが履修できる科目で、日本人学生が履修しても単位にならない。自らの文化的背景を異文化間コミュニケーションを通じて相対化することは、留

学生にとっても、日本人学生にとっても重要だ。そもそも国際交流の意義は、そうした作業によって、学生たちの成長を促すことにあるはずだ。日本事情Ⅱに日本人の学生も参加できるようにしたいと教務委員会にお願いしたところ、新しい共通科目を作ったらどうかと言われ、「比較日本文化論」という科目を新しく設け、日本語の単位にも読み替えることができるようにした。

（日本事情Ⅰ、Ⅱは、日本語科目ではあるが、共通科目に読み替えられると定められている。）私は、文化論を教える訓練は受けていないので、それなりの訓練を受けている非常勤の先生に担当して頂いた。最初にお願いしたのは、安部公房が専門というアメリカ人のジボー先生で、日本人のIdentityをテーマに近代文学を読む授業をしていただいた。その頃の問題は、学部生（日本人学生と学部留学生）と短期留学生の英語力或いは日本語力に差があり、バイリンガルで授業をすると、議論が深まらないということだった。そこで、ほぼ同じ内容を今年は英語で、翌年は日本語でするということもあった。「日本語科目を英語で教えると、英語のできない学部留学生に不利益になる。けしからん。」と当時の言語センター長にお叱りをうけたことがある。大学は最近英語の授業をなるべく増やそうとしているようなので、今ならそれほど問題にはならなかっただろう。「比較日本文化論」は、学生が自らの文化的背景を理解するだけでなく、そこで理解した内容を発信する訓練をする場として、カリキュラム上での国際交流の推進を実践する科目になっていると思う。

日本事情Ⅰは、イントロレベルの事情科目として、短プロ生と学部留学生が小樽の歴史や産業、自然環境などを体験的に学ぶ授業にした。それまで、短プロ生と学部留学生のカリキュラム上での交流の場がなかったが、日本事情Ⅰをバイリンガル授業にしたことで、それが実現した。彼らは、英語や中国語や日本語で、コミュニケーションを取りながら、コンビニやスーパーなどに出かけてリサーチしたり、地元のビジネスを訪ねて、話を聞いたりする。小樽に来たばかりの短期留学の学生には、これは、オリエンテーション的な

授業であり、既に日本での生活がある程度経験している学部留学生には、商大の先輩として新生の面倒を見、様々な文化的背景を持つ後輩と行動を共にすることで、視野を広げ、価値観を相対化する良い機会となる。例年は、秋学期に開講するのだが、去年は春学期に開講することになり、小樽ロードレースや潮まつりに参加して、レポートする課題を出した。小樽ロードレースには、毎年、マラソン走者でもある経済の和田先生が、陸上部の学生や教員の有志で商大代表団を組織する。その一団に日本事情Iを履修する留学生も参加させていただいた。私も一念発起して、2キロ走（学生たちは皆5キロ走ったが）に挑戦したが、途中歩いたりしたので、もう少しで制限時間オーバーで失格になるところだった。学生たちは皆、勿論苦も無く完走した。¹

留学生と日本人学生の共学を目的に新設した科目がもう一つある。それは、「言語教育実習」Practicum in language teachingで、留学生が彼らの母国語を教える授業にTAとして参加し、担当教員の監督の下、授業をアシストすることで、単位を取得するという科目だ。フランス人の留学生は、フランス語のクラスで、スペイン人の留学生は、スペイン語のクラスで、実習する。これを履修するには、中級以上の日本語を同時に履修していることが条件だ。実習を希望する学生の空き時間と連絡先をリストにして、言語センターのメーリングリストで実習生を受け入れてくださる先生を探し、マッチングする仕組みだ。学生は、週に一コマ、授業に参加し、教員の指示に従い授業をアシストし、学期末にレポートを提出する。そのレポートと指導教員の評価

¹ この20年の間で、結核を発病した私費留学生が一人いたが、それ以外は、概ね健康を維持して帰国してくれるのは、本当に有難い限りだ。特に短期留学生は、ジョギングをしたり、ジムに通ったりして、体調管理をしてくれていると思う。これまでも私の知らないところで、国際交流室では、様々な学生の健康状態に気を配っているのだろうが、留学生の肉体的精神的健康維持の為にも課外活動への積極的な勧誘が望ましいと思う。もう一つは、学生へのミールプランの提供だ。最低、安価な朝食だけでも寮生に提供できると良いのではないかと思う。

を基に成績が出る。これは、学生に大変好評だ。交流の範囲が広がるだけでなく、母国語についての様々な発見があるようである。昨年初めて日本語の教員資格を取ったという4年生の日本人学生が、この科目を履修し、初級日本語のクラスで実習した。一応学則上は、日本語科目に分類されているので、日本人学生は、履修できないことになっているが、この科目の趣旨を考えると、日本語の母語話者もこの科目に限っては、履修を認められてしかるべきで、学則に但し書きを書けば良いだけのことではないかと思う。去年この学生に実際単位が出たかどうかは覚えていないが、将来的には、留学中に日本語のTAを経験してきた学生や、日本語教育に興味を持っている学生に実習生としてTAをしてもらうのは、その学生にとっても、またクラス運営の観点からも、有益であろうと思う。²

「日本語学」は、「比較日本文化論」と同じく、日本語の単位に読み替えることのできる共通科目だ。この科目も赴任して間もなく新設していただいた。これは、主に日本語の母語話者である日本人学生に、日本語を一言語として客観的に把握し、言語体系としての日本語への理解を深めてもらいたいという思いで開設した。私は私立のミッション系の大学で学部時代を過ごしたが、国語と人間学が必修だった。商大には国語の授業がないので、日本語の授業があってもいいのではないかと思ったのだ。当時昼間主の言語学の授業が隔年で開講されていたので、その言語学が開講されない年度に、上級日本語Ⅳと隔年で開講することにした。日本語なら簡単だと思われたのか、初年度には、100人以上の履修者がいて、大教室でマイクを使って授業をすることになった。如何にも単位を取りたげにしている3・4年生を呼んで、それぞれの席の近くに座っている学生とグループを作るように言いつけ、連絡

² 私が長く在籍していたアメリカの大学では、ほぼ全てのプログラムに、このPracticumとIndependent Studyという科目が用意されている。前者は、上級生による下級生へのpeer supportを可能にし、後者は、履修者が少なすぎてクラスを開講できない場合とか、カリキュラムの変わり目で、古い科目を開けない時などにも用いられる。

用の封筒を渡した。それにキャッチーなグループ名とメンバーの氏名と学生番号を書かせ、毎回授業のハンドアウトや提出物をその封筒でやり取りすることにした。今はMANABAで出席も簡単に取れるし、グループ分けも簡単にできるから、こんな面倒なことをする必要はない。課題も出し易いし、提出されたレポートにコメントもすぐ書いて、授業運営は随分楽になった。しかし、毎回へんてこなグループ名を呼んで、連絡袋を取りに来てもらうのも、悪くはなかったと思う。特に今年のように学生に対面することなく、Zoomでリモート授業をしなければならない状況が続くと、その思いは一層強い。そもそも学生の顔を見て何かを手渡すことができるというのが、教育の醍醐味ではないか。多分多くの大学教師は、夏の静かなキャンパスを好む。新学期が始まり学生たちがキャンパスに我が物顔で帰ってくるのを少し疎ましく思うものだ。私もそうだ。しかし、2020年後期のキャンパスには学生がいない。既に部外者となった私でも、この異様に静まり返ったキャンパスを見ると悲しくなる。

9月、日本語プログラムに新しい専任教員の山川先生が赴任された。コロナ禍で今は、まだ埼玉にいらっしゃるそうだが、春には、小樽に引っ越してこられると伺った。これからは、山川先生がまた新しい日本語のプログラムを運営されることになると思うが、参考までに、これまで商大でどんなプログラムが運営されて来たかを少し記録しておくのも良いのではないかと思います。今回紀要にスペースを頂いたので、思いつくままに書いておくことにしたのだ。普通の会社組織では、前任者から後任の方への引き継ぎというものがあるのだろうが、大学では、必ずしもそういう事はない。実は私も、私が赴任する前に、留学生向けの日本語教育がどのような形で、実施されていたか詳しく聞いている訳ではない。短期留学プログラムを始めるにあたって、日本語の専任のポストができ、私が採用されたと理解している。つまり、私以前には、日本語科目はいつくかあったが、日本語プログラムと呼べるような体系はなかったのだろう。少なくともそれらの科目群をコーディネートする

専任の教員はいなかったということだと思う。

この20年で大学は変わった。正直良くなったのか悪くなったのかは私には判らない。国立大学から独立行政法人となり、大学の組織も改編された。国際交流センターは、実質なくなり、グローバル戦略推進センター（CGS）という全学的な組織の中のグローバル教育部門に取り込まれ、短期留学プログラムを含む所謂国際交流に関わる業務がその部門の下に集約された。最近では国際交流という言葉自体があまり聞かれなくなったように思う。日本語プログラムは、もともと大学の組織図の中でも、中途半端な場所にあり、日本語専任のポストは、言語センターに張り付いているが、プログラムの運営は、CGSの教育支援部門の中に置かれる日本語教育コーディネーターとしての立場で行うことになる。私は確かに言語センターの教員で、センター会議に出るが、日本語プログラムは、言語センターからは言わば独立したプログラムだと言える。言語センターは、学部生に語学の卒業所要単位14単位を修得させるという目的に向かって一丸となる組織で、個別言語のそれぞれがプログラムを運営するというよりは、一つの大きな外国語プログラムのように私には思える。今だから正直に言うと、日本語プログラムは、この言語センターの外国語プログラムとは相いれない。もし、私が国際交流センターと言語センターの両方のポストで、雇われていたら、カリキュラムの変更を含む様々なことが、つまり、私のやりたい事が、もう少し容易にできていたかもしれない。日本語の単位が卒業所要単位の語学の単位に読み替えられるからといって、日本語がフランス語やドイツ語と同じ初修外国語科目という訳ではない。言語センターの先生の中には、短期留学生は非正規学生なので、自分たちの教育活動の対象ではないと発言される先生もいらっしゃる。この方は交換留学制度が協定校間で学部教育を共有する制度であることをご存じないのかも知れない。国際交流室から派遣留学生の面接などを依頼されると、余計な仕事が増えると文句をいう先生もいらっしゃる。このような態度は、国際交流プログラムに前向きな姿勢とは到底思えない。外国語教育を担当する

言語センターの先生が、国際交流に後ろ向きだとしたら、これほど残念なことはない。

留学生の存在がキャンパスの多様性を担保し、ひいては大学の教育の質を高めていることを、忘れてはならない。在学生の殆どが道産子であっても、世界中から様々な文化的背景を持つ留学生が来て共に学ぶことができれば、大学は地域にも世界にも開かれた場所になるはずである。勿論もっと女性の教員や管理職を増やすことも大事だが、協定校ももっと増えるといいのではないかと思う。今年は、コロナ禍で国際交流室は大変だったに違いない。去年から来ていた留学生も直ぐ帰国してしまうのではないかと思ったが、3月の終わり頃には、ヨーロッパや中国より小樽が安全な場所になり、彼らは結局夏までZoomで授業を受けて、その後無事帰国した。2011年の福島原発事故の後、ちょうど東京にいたドイツ人留学生が即刻帰国させられた。あの時も留学生が戻って来ないのではないかと心配した。しかし、今年は、それを遥かに凌駕する危機的状況だ。この秋中国から来た留学生は一人だった。コロナ危機で危うくなっているのは、短プロだけではない。大学の教育そのものが今大変危うい。曜日を限定して、人数を制限して、新入生だけでもキャンパスに呼び戻す方法はないものなのかと思う。

何年頃だったかはっきり覚えていないのだが、10年以上前のことだと思う。商大の卒業生だという方が訪ねて来られて、留学生の為の日本語教育でボランティアをさせてもらいたいという。アオバトの会というグループで、留学生の会話のパートナーをして頂いたり、自習クラスを組織して下さったりした。時に授業の中でTAのようなことをお願いすることもあった。短プロ生は勿論、大学院生や研究生もアオバトセッションに参加し、楽しく交流させていただいた。このボランティアの方々の為に日本語の勉強会も開いたし、日本語教授方や日本語について公開講座で勉強もさせていただいた。これまで多く留学生が大変お世話になった。改めてお礼を申し上げたい。春に

山川先生が小樽にいらっしゃったら、是非お引き合わせしたい。アメリカで日本語を教えていた頃は、教室の中をいかに日本語モードにして充実させるかを考えていたが、小樽では、教室の外をいかに活用するかを考える。思えば、沢山の方に助けていただいて、この20年何とか日本語プログラムを運営してきた。非常勤の阿部先生、富田先生には、長年に渡り商大の日本語教育を支えていただいた。心より感謝申し上げたい。このコロナ禍を何とか克服した暁には、また優秀で礼儀正しい留学生が多数商大の日本語プログラムに戻って来てくれることを願いつつ、山川先生にバトン³を渡すことにする。

2020年12月11日

³ 最後に、しかも脚注でこんなことを書くのは、恐縮だが、実はやり残したことがある。大学院生に日本語の単位を出せなかったことだ。アメリカでは、大学院と学部の四年次プログラムが相互乗り入れしている上、院生には外国語を2つ以上取らなければならないというような語学の卒業所要単位が課せられていることが普通なので、学部の語学の授業を時々院生も受講することがある。クラスに院生が一人でもいると、クラス全体の士気が上がる。実は商大の大学院の科目には、上級外国語というのがあって、学部の同名の授業を履修して単位が貰えることになっているが、フランス語やドイツ語の上級を履修できる院生は（それは中国人留学生が多いのだが）いない。研究生はもちろんだが、院生となった留学生の中には、まだまだ日本語の訓練が必要な学生がいる。院生にも学部の上級日本語のクラスを履修して、単位を出せるようになればいいと思う。もう一つ、9月に日本語初習者の為の補講を実施してきた。これは、秋学期に開講する初級クラスの足並みを揃える目的で始めた。母校で1学期程度日本語を勉強してきた学生と、ゼロスタートの学生にレベルの異なる2つのクラスを開講するリソースがない為、後者に学期前に補講をして、秋からは双方が初級クラスで学べるようにしたのだ。これも、しかし、かなり集中して、20コマ以上授業をするので、できれば、夏の集中講義の扱いで、単位化できれば望ましいと思う。